

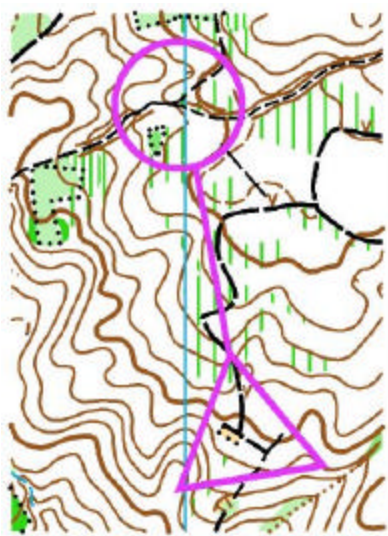
今回はステップメソッドの後半、中級から上級へのステップアップに欠かせない技術に対応するレッグを検討する。

前回の解答例

前回は、以下のEFGに対応するレッグを地図上で組んでみようという課題で終了した。その地図に、解答例を示しておこう。

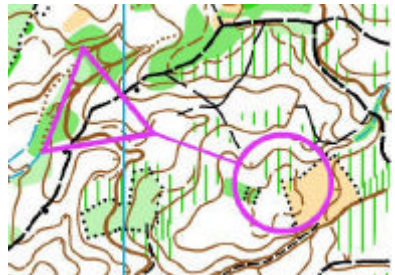
E：ショートカット（道を一瞬離れる）

道を離れて森に入ることは、初級のオリエンティアにとって、大きなステップである。不安や大きな失敗体験を与えないためにも、このように、離れた先が確実に分かる道などの特徴物で、しかもそのすぐそばにコントロールがあるような、レッグを組んでおきたい。



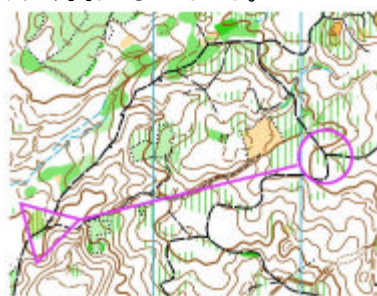
F：大きな特徴物（キャッチングフィチャー）への短い直進

森の中での移動がもう少し進むと、このように、大きな特徴物を利用した、少し長めの直進となる。図では遠くからでも見通しの利くオープンな次のコントロールとすることで、森の中を通過する不安を和らげるようにした。



G：簡単なルートチョイス

初級ではルートチョイスは勝負を左右するものというよりも、自分の自信の程度に応じて提供される可能性のオプションという側面が強い。この課題でも、「短い難しいルート」と「易しいが遠回りになるルート」がチョイスの対象となっている。



等高線を教える

日本のトレインでは、等高線の理解はIOFのステップメソッドより早い段階に教えた方がよいと前回指摘した。

日本のトレインでは尾根・沢がはっきりしているので、それを利用して、尾根・谷を識別することが要求されるようなルートを設定する。ハンドレールとして利用できる、通行可能度と見通しのよい尾根や谷を使ったレッグの例を図4に示した。これはステップメソッドでいうKやLに相当するレッグとなる。

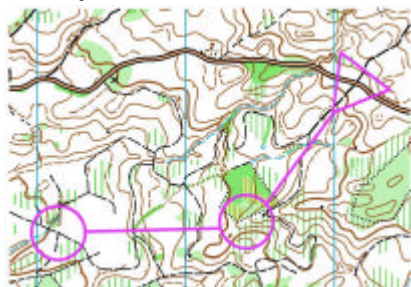
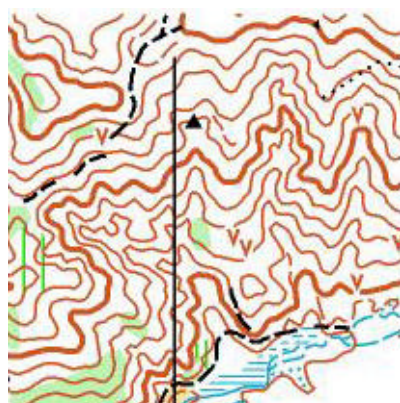


図4 等高線（尾根）を読ませるレッグ

尾根や沢の把握は、ある程度経験を積んだ中級者でも難しいことがある。尾根・沢を反転して捉えてしまうことはもちろん、尾根線・沢線の正確な把握が難しいことがある。これらは実際のオリエンタリングの中での練習だけでなく、地図を使った机上トレーニングなどでも補っていくべきだろう。粘土などで作った立体的な模型とともに等高線を示すことができればベストである。

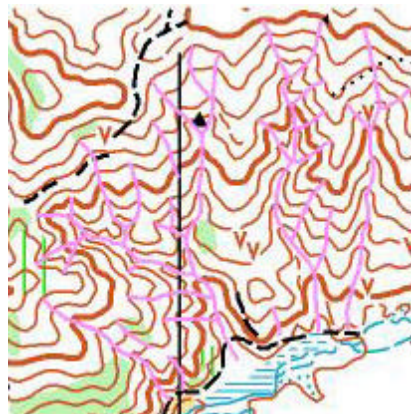
地図上に正確に尾根線・沢線をトレ

ースさせる課題は意外と難しい。等高線の行間を補いながら、連続的に線を引く必要があるからだ。しかし、地図上でこれが正確にできるようになれば、現地では意外と目立つ些細な方向の変化にも敏感になることができるだろう。図のような尾根・沢が複雑に発達する地形で、沢線や尾根線をきっちり追ってみよう。最初は、それができているかどうかを確認するために、地図に描き込みをするとよい。



図：尾根・沢把握の机上トレーニングの例。こうした地図に丁寧に尾根・沢線を引くことは、トレインで確実に尾根・沢線を引くためのよい準備となる。

解答例



丁寧に方向の変化を追うと、普段大雑把に捉えている沢の複雑さやその微妙な方向変化の様子がよりはっきりと理解できるはずだ。

沢線を引かない上の図をぱっと見て沢をどう選んでいけば特定の上流部に達するかを判断し、それを下のような図で確認するというのも、実践的なトレーニングである。

（村越 真）